令和７年度東京都特定外生物（キョン）防除対策検討委員会（第１回）
議事概要

１．開催日時　令和７年７月 23 日（水）10:00～12:00

２．開催形式　WEB によるオンライン会議

３．議事
　１）令和６年度の事業報告について
　２）令和７年度の事業計画について
　３）防除実施計画の改定について

４．出席者
■検討委員
　石井　信夫　　東京女子大学　名誉教授
　織　朱實　　上智大学大学院地球環境学研究科　教授
　加瀬　ちひろ　　麻布大学獣医学部　講師
　深澤　圭太　　国立研究開発法人国立環境研究所　主任研究員
■臨時委員
　小池　伸介　　東京農工大学大学院グローバルイノベーション研究員　教授（欠席）
　佐々木　洋平　　一般社団法人大日本猟友会　代表理事会長（欠席）
　羽澄　俊裕　　元東京農工大学農学府　特任教授
■関係機関
　髙橋　英雅　　大島町　産業課農業係
　本間　政人　　関東地方環境事務所伊豆諸島管理官事務所　国立公園管理官
■東京都
　加納　大二郎　　東京都総務局大島支庁　土木課長
　鈴木　雄大　　東京都総務局大島支庁土木課大島公園事務所　課長代理
　竹田　哲郎　　東京都総務局大島支庁土木課大島公園事務所　主任
　小田　博之　　東京都総務局大島支庁　産業課長
　上野　大　　東京都総務局大島支庁産業課　林務担当　主任
（事務局）
　上中　章雄　　東京都環境局自然環境部　野生生物担当課長
　照沼　愛　　東京都環境局自然環境部計画課　課長代理（野生生物担当）
　中村　真悟　　東京都環境局自然環境部計画課　鳥獣保護管理担当　主任
　平井　雅規　　東京都環境局自然環境部計画課　野生生物担当　主事

■事務局

一般財団法人自然環境研究センター

５．配付資料

資料 1-1：令和 6 年度キョン防除事業報告

資料 1-2：令和 6 年度キョン捕獲結果

資料 1-3：捕獲事業の評価

資料 1-4：生息状況モニタリングの結果

資料 1-5：植生モニタリングの結果

資料 2：令和 7 年度防除事業実施計画（案）

資料 3：東京都キョン防除実施計画の改定について

６． 議事内容

（1） 令和 6 年度の事業報告について

1）令和 6 年度の事業概要

● ドローンについては、見切り捕獲で進めて行くのがよいとの結論か。

→（事務局（東京都））今年度も試験を行う予定であり、その中で様々な方法を試して効率的な方法を検討したい。

● ニュージーランドの目撃情報や一般家庭や畑での痕跡トラップなど住民参加型情報収集システムを参考にして、住民参加の方法を検討するとよい。

2）捕獲結果、捕獲事業の評価

● 擦れた個体が増えることに今後どう対応するか。

→（事務局）足くくりわな等の別の方法を考えている。

● 市街地での捕獲数が年々増えているが CPUE は変わらないので、個体数が多いということであろう。捕獲効率を高めるために囲いわなを増やすことは検討しているか。

→（事務局）囲いわなも増やしたいと考えている。

→囲いわなであればメスも捕獲できるので、是非展開してほしい。潜める場所を無くしたり、繁殖を抑えるために農地を囲うといった基本的なことも進めるべき。

● 組織銃器捕獲で次の捕獲までに個体数が増えないよう、きっちりと捕獲圧をかけるべき。また、足くくりわなを森林域に展開して、全体の捕獲率を高める必要がある。

● 捕獲カバー率がほとんど変化していないことが捕獲頭数の頭打ちにつながっているのではないか。カバー率を上げる方法をどう考えているか。

→（事務局）現在の方法が適用できない場所については、別の方法で捕獲することになる。

→次期計画に向けていよいよ大詰めの段階であるが、これから捕獲を広げる場所については大胆なことをしなければならない。

→捕獲カバー率は単年では 50%程度で、捕獲圧がかかっていない場所がある理由を細かく精査して、なぜ空白なのか詰めていくことが大事。捕獲事業区の柵の効果を検証して、メンテナンスで効果を上げることを考えてはどうか。

- VAST 法の読み方について、全体の頭数が減っていない中で、色の濃い場所が減ったということは、高密度の場所が減ったということでよいか。

→（事務局）そうである。

→VAST 法と除去法により、生息密度の時空間分布や個体数の推移がわかるので、モニタリングしていった方が良い。合計値と信用区間を見ると生息数が減っているかといったことも分かるので、VAST 法の結果を使った様々な結果の見せ方をしていくとよい。

３）生息状況モニタリングの結果

- 市街地の個体数推定結果と密度指標とが一致していないが、個体群動態にシンプルな過程を置いたり、増加率を一定にしたりするので、実態と合わなくなることがある。令和 6 年末の結果はこれでよいとして、今後の推定にあたっては課題があることを記載しておいた方がよい。

→（事務局（東京都））今後も精度を高めるための試行は行っていきたい。

４）植生モニタリングの結果

- 植生モニタリングは生息密度が下がっているか確認するためにも重要な指標である。キョンの生息密度との関係は分析しているか。

→（事務局）以前、関係を分析したことがあるが、明瞭な関係は見られなかった。キョンの生息密度の地域差が大きくなれば傾向が現れるかもしれない。

→第 4 期の終わりには傾向を見たいので、準備しておいてほしい。

→柵内外と設置前後の比較を行っているので、これの効果量を計算して、密度との関係を見るとよい。

- 希少種の種毎に生育地を把握して、どこまで保護柵の手当てがされているか評価するとよい。

→（事務局）有識者ヒアリングによりデータは作成している。

（２）　令和 7 年度の事業計画について

- 令和 8 年度以降の新たな 5 か年の捕獲期間に入るところで、令和 7 年度は大きな節目の年と言える。この方法であれば次の 5 か年で目標達成できるという確証をつかめるように、令和 7 年度中に取組む必要がある。
- 足くくりわなの導入の方向性は良いが、どの程度かけると何割捕れるのかといったことを調べる予定はあるか。その場合、個体数が明らかな場所で試験する必要がある。

→（事務局）試験でデータを得るのがよいか、事業をしながらデータを得るのがよいか考

えたい。

- 農作物被害を減らすためには捕獲ではなく防除柵の設置が重要であり、計画に書いたほうがよい。

→（事務局）防除実施計画では、生態系や農作物被害を無くすことを目的にキョンを根絶させるとしているので、捕獲により被害を減らす方向で考えている。

- 普及啓発にあたっては、大島町と連携するとよい。
- 市街地でカバー率をどの程度上げるのか、目標設定はあるか。今後のことを考えると、しっかりと考えていった方が良い。

→（事務局）目標設定は現実的には難しい。

- 捕獲空白域の理由や、効率的な捕獲方法、捕獲事業区の柵の効果などを分析して効果を高める必要がある。足くくりわな捕獲が実施されていないが、千葉県を参考にして、捕獲効率や生息数の低減効果を分析するとよい。

（３）　防除実施計画の改定について

- 計画案の作成スケジュールを教えてほしい。

→（事務局（東京都））たたき台を示して意見を聞く機会を設け、年度末の検討委員会で合意を得たい。

- 第 4 期の 5 か年は非常に重要である。第 3 期の課題を第 4 期にむけて軌道修正を図るために、令和 7 年度に必要なことを行わなければならない。年度ごとの見直しについては、数値目標を設定して評価する必要がある。

→（事務局（東京都））第 4 期は重要と認識しているが、数値目標にはどのような指標が良いかも含め、どこまでできるのか検討したい。

→いつまでも同じ数値目標が並ぶのは良くない。現場は今のままでは根絶できないと実感している。予算が増やせないとすると、どう捕獲効率を高めるかが大事になるが、工夫が見えないため、不安を感じる。

→（事務局（東京都））事業者は工夫している。予算をより効率的に使えという指摘と理解した。

→予算を増やしたり効率を上げるといったことを本気でやらないと、目に見えて減らない。

- 農作物被害だけでなく、社会的に関心のある感染症のリスクも取り上げて、住民にもたらす潜在的なリスクを発信するとよい。
- 足くくりわな捕獲をどのくらいできるかがポイントになるが、ネコの錯誤捕獲の問題が大きな障壁である。本土では SFTS の問題でネコの屋外飼育の考え方が変わってくるので、その流れに合わせて、保健所と連携して室内飼育を推奨するとよい。

→（事務局（東京都））足くくりわな導入は必要と認識しているので、室内飼育の普及啓発をしなければならないと考えている。感染症に関してしっかりと情報収集して普及啓発したい。